

I. 「美術に関する調査研究の助成」 研究報告

1. 1996年度助成

① 中世後期における六道絵と十王図に関する図像学的研究

研究者：愛知教育大学 助教授 鷹 巢 純

1 研究の目的と方法

生と死とはわれわれの観念の中では相互に不可分のものであり、われわれがイメージする世界とは昼である生の半球と夜である死の半球とによって構成されているのである。したがってわれわれの属する文化伝統が世界をどのように認識してきたかを探ろうとするなら、現世と他界との関係がどのように把握されてきたかということに目を向けることが重要であろう。幸いにして日本には主に鎌倉時代以降のものではあるが六道絵や十王図といった現世と他界との結び付きを示す作品がある程度まとまって遺されており、それらには純粹に仏教的な内容のみならず当時の日本人を取り巻く雑多な世界観が豊富に組み込まれている。これらの作品が示す世界観の歴史的展開を追うことで、日本人にとっての現世と他界とがどのようにイメージされどのように変質しつつ今日に至ったかを解明し得るはずだが、残念ながらこれまでの六道絵・十王図に関する作品研究は鎌倉時代に制作されたものを対象とすることが多く、まれに室町時代以降の作品に関する研究がなされた場合でもその作品の図像や構成に考察の中心を据えたものはごくわずかであった。したがって美術史の現状では、同じ日本の問題でありながら中世の現世・他界観と近世のそれとが一つの連続として認識されぬまま相互に異質なものとして放置された状態にある。現在わたしが進めつつある研究は、先学の業績を継承しつつ鎌倉時代以後近世初頭に至るまでの六道絵・十王図を中心とした現世・他界表現の変遷をたどるものであり、本研究もその一環をなすものである。本研究は大きくふたつの手法からなる。第1は絵画作品にあらわれた図像構成の展開から現世・他界の結び付きを分析するものである。この方法を用いてわたしは既に近世初頭の長岳寺本六道十王図について分析を終えているので、今回は図像構成においてこの長岳寺本と鎌倉時代の諸作例とを結ぶ位置にあると思われる茨木市水尾本六道十王図について分析を試み、中世から近世に至る六道十王図の図像構成の変遷をよ

り連続的に捉える。第2の手法は関連テキストにあらわれた内容構成の展開を分析し、第1の手法を補完するものである。具体的には『十王讚歎鈔』『十王讚嘆修善鈔』『十王讚歎修善鈔図絵』という一連の『地藏菩薩発心因縁十王経』関連テキストを対象として取り上げ、それらが同一の原テキストから派生したものでありかつ六道十王図と内容的に密接な関連を有していることを解明する。なお、これらの成果は学会において2本の口頭発表(注1)がなされ、3本の論文(注2)に論文化されている。

2 絵画作品にあらわれた構成の展開

2-1 水尾本の概要

大阪府茨木市水尾地区にある弥勒堂は「十王図」と呼ばれる3幅のうち中幅を失い現存2幅を有する(〔図1・2〕見取り図)。この作品は1991年に「恐怖と救済」展(岡山県立博物館)の図録において基礎的データが紹介されたが、詳細な検討は現在に至るまでなされていない。水尾本は十王関連図像のほかに六道に関する図像をも含み、こうした作例は私がこれまで「六道十王図」と呼んできた範疇に属するものであり、同範疇の現存作例のうち鎌倉時代にまで成立年代が溯るものとしては、わずかに13世紀後半の禅林寺本十界図と極楽寺本六道絵の2例を数えるに過ぎない。水尾本の制作年代に関しては、前述展覧会図録では南北朝時代とされるものの、定式化されない本地仏の配列が鎌倉時代に特有の現象であること、画中の五輪塔の形態が1295年銘伝曾我兄弟墓をはじめとする鎌倉後期の石造五輪塔のそれと類似すること、霞の表現様式が一遍聖絵や春日権現験記絵巻といった13世紀末から14世紀初頭の作品と共通することから鎌倉時代末葉と推定する。したがって禅林寺本と極楽寺本より遅く前田家本十王地獄図より早い時期に、水尾本は成立したものと思われる。

現存状況によれば水尾本には画面上部に十王を配し画面下部に六道図像を配する点で極楽寺本に近い構成原理が認められるが、一方で画面下部の六道図像について、生老病死および求不得苦・愛別離苦そして不浄相といった人道図像が、すやり霞を隔てて十王図像のすぐ下にまとめられ、悪道図像と十王との間に介在するように配される、特徴ある構成も認められる。

2-2 水尾本の図像構成

水尾本は、現世と他界とのあり方に着目してみると、十王部分と六道部分という単

純な2層構造にとどまらず、上中下と分かれた三つの図像群から成り立っていることに気づく。最上層である第1図像群は斎日順に右から左へと居並ぶ十王によって構成される。この図像群は六道図像と霞によって完全に分離されるが、このことは以下の図像群に対する明確な支配権と、衆生の転生先として想定し得ないという意味においての以下の図像群との厳然たる区別を示している。中層に位置する第2図像群は、現世における人間の一生によって構成される。人間の一生とはいうもののそれは先に述べたように人道における八苦を配列に留意することによって右から左へと生涯の事象をたどれるようにしたものであり、それぞれの図像自体は人道苦相の図像伝統に沿うものである。最下層を形成する第3図像群は、描かれた地獄の序列と配置から推測するに、おそらく右から左へと地獄道を降下してゆく構成をとっていたと思われる。

他の層との関係が明確な最上層に比して、中層と最下層との関係はより微妙であり、はるかに融和的に処理される。両図像群の間にあるのは、地獄道よりも悪業の軽微な餓鬼道・畜生道といった悪道にまつわる図像や、奈河津・野辺といった境界的な色彩の濃厚な図像、そして転生あるいは悪道からの救済を主題とした説話的なおもむきのある図像である。そしてこれらの図像の多くは、第2層あるいは第3層の各図像と親和性をもつように選択・配置される。例えば、地獄の釜が割れて亡者たちが蓮華化生を遂げて極楽へ向かう図像は黒縄地獄の左上に描かれあたかもその一部をなしているかのような趣をもち、畜生道は生苦の屋形の庭先に放たれた家畜として、あるいは屋形の住人の狩りの対象として描かれる。目連救母説話図像では、地獄での母との再開を經典どおり阿鼻地獄の上端に配置する。また不浄相をはじめとする野辺に集められた諸図像が老・病・死苦の描かれた屋形と連続する感覚のあることは先に指摘した通りである。地蔵に手を引かれ野辺を目指す亡者の姿も、位置的にはその下に描かれた地獄を地蔵の加護により脱し、彼の肉体の放置された野辺へ蘇生のために向かっているが如き風情である。こうした図像、わけても地獄道よりも悪業の軽微な悪道の図像が人道のような現世と地獄との間に挿入される例は、他に長岳寺本などにもみられる。水尾本において奈河津・野辺といった境界的な色彩の濃厚な図像が現世と他界とを取り結ぶ結節点として機能していることは言うまでもないが、転生あるいは悪道からの救済を主題とした説話的なおもむきのある図像は単に境界的であるという点だけではなく、現世と他界とを往還するという点においてさらに積極的な意味をもつだろう。水尾本を形成する三つの図像群のうち十王図像が霞によって他の図像と隔てられてい

るのに対し、現世を示す第2図像群と他界を示す第3図像群とはこのように両者を親和的に結び付けるのみならず両者間の往還を積極的に誘導する諸図像によって強く関連づけられていたと思われる。これらふたつの図像群の組み合わせについては、少なくとも二つの大きな可能性が考えられる。

可能性の一は、第2図像群において生涯を終えた人間が第3図像群での悪道巡歴へと赴くというものである。これは直列型の組み合わせで、人間は死後悪道を巡歴した果てに善処へ赴くのだという発想に連なるものである。現に水尾本における善処である可能性の強い天道は左幅の左端に配され、地獄を降下した果てに目指すべき位置にあるとも解釈できる。こうした発想の先駆的な作例は極楽寺本であり、長岳寺本においてはこの構造がさらに明確化し、兵庫・松禅寺本十王図などの江戸時代の六道十王図に概念がさらに単純化された形で継承される。

可能性の二は、第2図像群と第3図像群とを遺族の世界と死者の世界とに当てはめるものである。死者が悪道をさまよう間にも、遺族には遺族の人生が存在する。第2図像群の位置は悪道をさまよう死者を十王にとりなすのにふさわしい位置であり、現世を生きる人間に対しこの位置関係こそが供養を通じての死者の救済を呼びかけていると解釈することもできよう。両者の間に挟まれた図像は、人生のあるいは悪道巡歴の、さまざまな段階での相互の往還を可能にするという性格を示し、死者と生者との並行関係を強調するものである。

いずれも妥当なこれら二つの可能性は相互に排除し合う性質のものではあるまい。死者が悪道を巡歴する今まさに人生を送る遺族もまた、やがて悪道を巡歴する運命にあるが、そのときには彼らの遺族が人生を送っていよう。第3層は死せる父母の現在であると同時に自らの未来でもある。こうした重層性は供養の重要性を理解させる上で極めて効果的であったろう。すなわち、いずれ自らもそうなる運命であるがゆえに生者は死者を供養しなければならないのである。

3 テキストにあらわれた構成の展開

3-1 テキストの概要

日蓮撰述の伝承をもつ『十王讚歎鈔』は1254年の年記のある写本が三宝寺に伝存している。隆堯撰述の『十王讚嘆修善鈔』は1418年に原形が成立、1433年に完成をみたことが跋文から確認できる。徹外増訂の『十王讚歎修善鈔図絵』は1851年の成立であ

ることがやはり跋文に記される。それぞれは鎌倉時代・室町時代・江戸時代と異なる時代に成立し、単純化すればほぼ『十王讚嘆修善鈔』は『十王讚歎鈔』を、『十王讚歎修善鈔図絵』は『十王讚嘆修善鈔』を増補したものと理解してよい。そしてそれぞれ日蓮宗・浄土宗・浄土真宗と異なった宗教環境で成立したテキストではあるが、子細に確認した結果、宗門的な立場から記された部分のごくわずかで構成の根幹にもほとんど影響しないことが判明した。したがって、すべてのテキストに共通の部分や、宗派を越えて受け継がれた増補部分は、日本人が共通して受け入れてきた認識であるとみてよからう。

3-2 テキストにあらわれた説話の傾向

ではこの共通認識のうちにみられる六道思想あるいは十王思想にはどのような傾向があるだろうか。そこでまず気づくのは説話に関する言及の充実ということである。それらの説話はいずれも『地蔵菩薩発心因縁十王経』にはみられなかったが、『十王讚歎鈔』以降、加速度的に数を増して引用されるようになったことが確認できる。これらの説話のうち、個別に検討を要する特殊な性格の「法然の生涯」「雄俊、墮地獄を免る」「地獄の釜の作者」の3点を除外すると、引用された説話は、大きく二つのグループに分けることができる。すなわちその第1は廿四孝のモチーフをはじめとした、親への孝行を扱った説話のグループであり、そして第2は悪業と結び付いた人間の転生を扱った説話のグループである。

そしてこのような性質の説話を引用する傾向は、実は六道十王図にもみられる。親への孝行を扱った説話のグループとしては、16世紀の出光美術館本六道絵に廿四孝に取材した三つの説話を確認できる〔図3〕。一方で悪業と結び付いた人間の転生を扱った説話のグループとしては、極楽寺本六道絵が『法苑珠林』や『三宝感応要略録』に基づく説話を少なくとも五種類図像化している。さらに六道十王図では、目連救母説話にまつわる図像が頻繁に描かれる〔図4〕が、これは悪道に堕ちた母を目連が救済することを主題とした説話で、親への孝行を扱った仏教説話のなかでも最も名高いものの一つであると同時に、目連の母が悪道を次々と生まれ変わって行くという点で、人間の転生を扱った説話でもある。テキストに増補されていった説話の二つのグループの特徴を合わせ持つこの説話を、六道十王図が好んで採り上げていたということは、『十王讚歎鈔』をはじめとする三つのテキストと六道十王図との間に共通した発想が

あったことの証左となる。その発想とは一つには死後世界観を支える倫理基準としての孝行の奨励であり、もう一つは転生する世界としての六道観である。

3-3 テキストにみられる構成の展開

次に構成面での増補の傾向にはどのようなものがみられるだろうか。『地蔵菩薩発心因縁十王経』にみられる構成は、人間の死後、死天山の道行きから説き起こし、十王の裁きを順次記述し、最後には迷妄を解くために釈迦が説法して終わるというものだった。これに対し、『十王讃歎鈔』では十王を順次めぐる間の地理的な情報がかなり増補され、十王に関する記述を終えた後で、五道転輪王に地獄の構成および等活地獄と無間地獄に関する詳しい解説をさせている。このように『十王讃歎鈔』では『地蔵菩薩発心因縁十王経』にみられた釈迦による説法という枠組みは既に取り払われ、構成の主眼が死後の道行きを疑似体験させる方向に向かっていることが確認できる。そしてこの道行きに地獄を加えたこと、しかも等活地獄と無間地獄という八大地獄の第1と第8を詳しく描写し、地獄道を下って行く趣を加えたことは、六道十王図の基本構造との深いかわりを示している。

『十王讃嘆修善鈔』と『十王讃歎修善鈔図絵』ではこの地獄に関する描写の後に、さらに阿弥陀の来迎に関する描写を増補する。この増補部分では、まず来迎の根拠である阿弥陀の四十八大願が示され、次いでその大願によって墮地獄から一転して極楽へ迎えられることになった人物の説話、念仏行者への阿弥陀の来迎と浄土の様子が連想形式によって並べられる。これらの記述は基本的には相互に独立した関係にあるが、地獄の描写以降を通読するなら、五道転輪王の裁判を終え、地獄を下って行く亡者がいたが、阿弥陀が大願を発し、亡者を地獄から救済し、阿弥陀聖衆の来迎によって、浄土へ迎え入れられた、という一連のストーリーとして読者がこれを誤読してしまう可能性は十分にある。しかもテキストの作者自身、読者にそうした錯覚を期待していた可能性が強い。というのも例えば『十王讃嘆修善鈔』阿弥陀来迎（極楽の情景）のくだりで、極楽における生活のすばらしさに感嘆した行者が、かつて閻魔王庁で苦を受けていた頃の自分を回想する記述があるが、彼が回想したような事実はこのテキストには記されていない。これは明らかに本来それぞれ独立して描写されたこのテキストの末尾の部分で、全体を通して一連の過程として錯覚させようとする、テキスト作者のアクロバティックな作為を示している。十王思想にあつては十王による裁判は亡

者の六道転生に先行し、六道思想にあっては六道は亡者がそのうちのいずれか一つに転生すべき所であったはずのものを、このテキストの作者は、十王の裁判に並行して、複数の地獄を経て極楽へと亡者に六道を巡りわたらせるように改変しようと意図していたと思われる。そうした作者の意図と矛盾する『地藏菩薩発心因縁十王経』を前提としたうえでその意図を実現しようとするれば、当然このように前後の因果関係を明示せず配列順序によって暗示するにとどめるという手法に頼らざるを得まい。『十王讚嘆修善鈔』や『十王讚歎修善鈔図絵』の作者は、十王思想における『地藏菩薩発心因縁十王経』の権威を利用しつつ、あらたな他界観を構築しようとしていたのである。

彼らが構築しようとしていた他界観は近世の六道十王図において完成する。室町時代の出光美術館本六道絵では十王の裁判と並行して六道の情景が描かれ、最後の第六幅に阿弥陀来迎が描かれ、六道巡りをした亡者が最終的に阿弥陀によって救済されたかのような印象を与える構成をとるが、ここでも阿弥陀の来迎を受けているのは念仏行者であり、六道めぐりをした亡者ではない。すなわち、出光美術館本にあっても『十王讚嘆修善鈔』や『十王讚歎修善鈔図絵』と同様に、悪道をめぐりわたった後に極楽へと向かう図式を関連づけたい図像同士の併置という形で辛うじて実現しているのである。絵画においてこの内容が直截的に表現されるには長岳寺本六道十王図の出現まで俟たねばならない。こうした六道十王図にあって、さきに論じた転生説話や蘇生譚といった六道世界の移動にかかわる説話の図像は、単に併置されただけであった図像と図像を結び付け、構成にみられるこのような流れを強調する役割を担っていたと思われる。

4 現時点における結論と今後の研究の方向

水尾本が示す第2図像群と第3図像群との関係に関する二つの可能性は、鎌倉時代から江戸時代にかけての『地藏菩薩発心因縁十王経』の注釈書が継続的に増幅してきた二つの内容、孝道の称揚と悪道での苦しみの強調とに合致する。孝道の称揚は遺族に供養の必要性を理解させ、悪道での苦しみの強調は当然自らの将来への不安を生じさせる。またこれは六道十王図ではないが、水尾本に遅れて現れる熊野観心十界図も、現世における人間の一生と他界における悪道巡歴とが上下に配され、その間に「心」字とともに巨大な供養壇が設けられ、供養する現世の人々と供養を受ける死者たちが歩み寄るといふ、水尾本と類似した構成をみせる。

水尾本は図像的にも構成的にも先行する作例の影響を濃厚に受けながら、六道十王図を構成する三つの構成要素を明確に整理する。しかしそれら三つの構成要素が相互にどのように関連し合うかについては択一的な決定をせず、一種オープンなままの構造を維持する。そこには以後の他界観が構築されるにあたってのさまざまな可能性が内包されており、その可能性の一つが熊野観心十界図のような構造を生み、また一つの可能性が長岳寺本に代表される近世六道十王図の構造を生んだのであろう。六道十王図をめぐるこうした歴史的展開は、『地蔵菩薩発心因縁十王経』を前提としながらも新たな他界観を形成しようとしていた『十王讚歎鈔』をはじめとするテキストの増補の方向性と極めて密接な関係を有していたのである。これらの事例にあらわれた他界観がどのような宗教思想を背景とし他の分野にどのような影響を及ぼしていったのかについての全体像の解明が今後の研究課題となろう。

注

- (1) ①鷹巣純「『十王讚嘆修善鈔』他と六道十王図にみる死後観の変遷」(東海印度学仏教学会第42回学術大会 1996年7月 於名古屋大学), ②同「茨木市水尾地区本六道十王図について -構成を中心として-」(美術史学会東支部例会 1996年7月 於東京大学)。
- (2) ①鷹巣純「茨木市水尾弥勒堂所蔵六道十王図に関する基礎的考察」(『愛知教育大学研究報告 人文・社会科学編』第46輯 1997年3月), ②同「『十王讚歎鈔』系諸本と六道十王図」(『東海仏教』第42輯 1997年3月), ③同「茨木市水尾地区本六道十王図について -図像とその構成を中心に-」(掲載誌未定)。



図1 水尾本六道十王図・右幅



図2 水尾本六道十王図・左幅

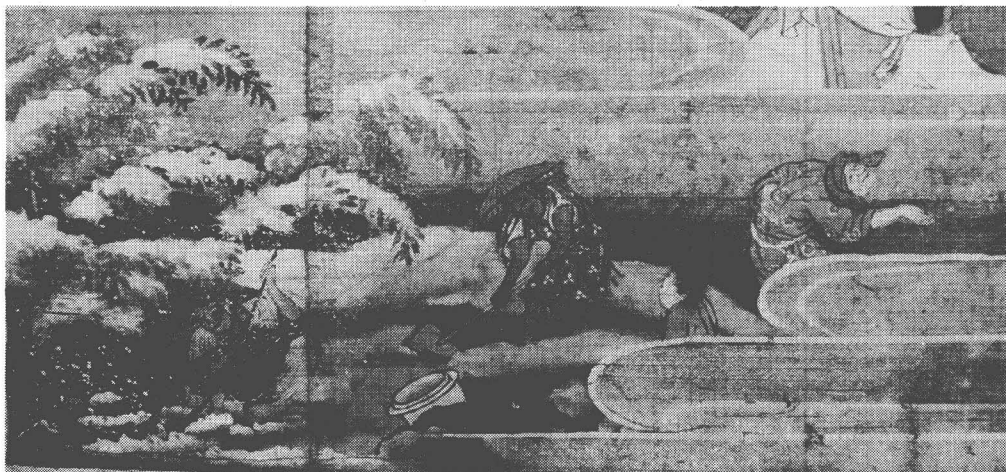


図3 出光美術館本六道絵第6幅部分 孟宗・郭巨・老萊子



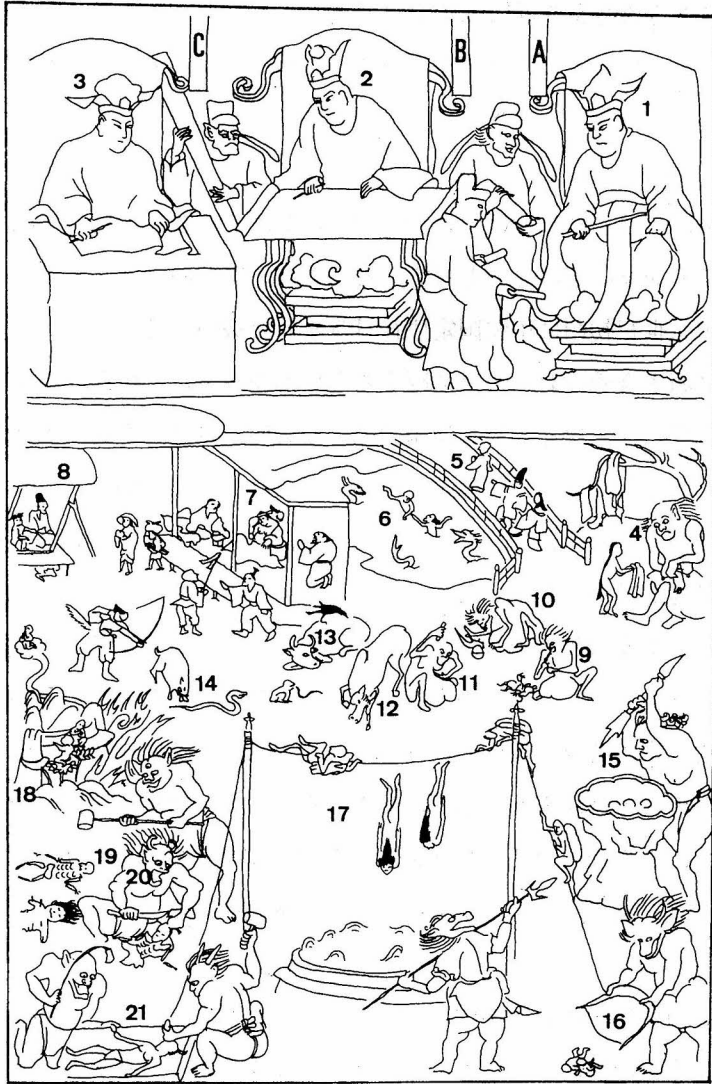
図4 水尾本六道十王図左幅部分
阿鼻地獄の目連



水尾地区本六道十王図 図像見取図

左幅

- 22：太山王 23：平等王 24：「斗市王」 25：五道転輪王 26：病苦 27：死苦 28：老苦
 29：不浄相 30：愛別離苦 31：天道 32：天人五衰 33：地藏による救済
 34：地獄で母と再会する目連 35：餓鬼となった母に飯を与える目連
 36：嘴のある虫が亡者を啄む 37：大蛇が亡者に巻き付く
 38：阿鼻地獄門 39：亡者を阿鼻地獄へ引きずる 40：銅汁を亡者に飲ませる 41：刀葉樹林
 42：亡者の舌を引き伸ばす



右幅

- 1：秦広王 2：初江王 3：宗帝王 4：脱衣婆 5：奈河橋 6：奈河津 7：生苦
 8：求不得苦 9：五子を食らう餓鬼 10：食べようとするとな飯が炎になる餓鬼
 11：自らの脳を食らう餓鬼 12：草を食む馬 13：鳥に背を啄まれる牛
 14：食物連鎖（獵師・猪・蛇・蛙・ミミズ） 15：亡者を白でつく 16：亡者を篩にかける
 17：熱鉄縄を亡者に渡らせる 18：釜が割れて蓮池となる 19：皮を剝がれた亡者に熱湯をそそぐ
 20：亡者の皮を剝ぐ 21：墨縄に沿って亡者を刻む

水尾地区本六道十王図 銘文一覧

- A：初七日秦広王大日 B：二七日初江王釈迦 C：三七日宗帝王文殊 D：七々日太山王薬師
 E：百箇日平等王観音 F：一周忌斗市王勢至 G：第三年五道転輪王阿弥陀 H：阿鼻大城